

昭和に
死す

森崎湊と小沢開作

松本健一

新潮社

昭和に 死す

森崎 湊と小沢 開作

松本 健一

昭和に死す——森崎湊と小沢開作

昭和六三年一月一五日 印刷
昭和六三年一月二〇日 発行

著者 松本健一

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

東京都新宿区矢来町七一

郵便番号 一六二

電話（業務部）03—二六六—五一—

（編集部）03—二六六—五四—

振替 東京四—八〇八

印刷 株式会社光邦

製本 大口製本株式会社

定価 一〇〇〇円



© Kenichi Matsumoto, 1988
Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-368401-1 C0023

昭和に死す*目次

海の幻——森崎湊の自決 7

- はじめに——二十歳の遺書
- 死は既定であつたか
- 森崎三兄弟の戦争体験
- 頽廃への情熱
- 有明海のほとり
- 喪失感を埋めるもの
- 再現フィクションされた自己精神史
- 思想という意匠
- 満州国というロマン主義
- 理念と現実との乖離
- アジア解放の夢と抵抗者としての伝説
- 自己解体の歌
- 帰郷のあと
- 自己と国家への懐疑
- 香良洲の浜で
- 母の狂乱——おわりに

埋み火——小沢開作の夢 117

- はじめに——ロバート・ケネディと小沢開作
- 町の老齒
- 医者
- パトリ（原郷）としての「満州」
- 山梨、東京、そして長春
- 「満州」の意味
- 万宝山事件から満州事変へ
- 協和党運動の挫折
- 北京の胡同で
- 『華北評論』をめぐって
- 〈政治〉についての唯一つの言葉
- 人の死——おわりに

昭和に死す——あとがきにかえて

装 幀
櫻井昭治

昭和に死す——森崎湊と小沢開作

海の幻——森崎湊の自決

夜明けの海はまだ暗く
夢のなかに 幻の城は聳えていた

(原口統三)

はじめに——二十歳の遺書

死が既定であるとき、いや死が既定であると意識するとき、ひとは美しく死ぬことばかりを考えて生きようとするのではないか。そこでは、哀しいことに、美しく死ぬことがいわば生の目的になってしまっている。わたしはそんな哀しい人間の精神のかたちを、昭和二十年八月十六日つまり敗戦の翌日、三重県一志郡香良洲浜いちしからすにおいて割腹自決した海軍少尉候補生（特攻要員）の森崎湊みなとに見出すのである。

森崎湊が自決したとき、かれはまだ二十一歳の青年だった。敗戦はおそらく、特攻要員として待機していた森崎に死からの解放を意味したろう。しかし、戦争中美しく死ぬことばかりを考えて生きていたこの青年にとって、死からの解放はかえって生の目的の喪失と意識されたようである。なぜなら、かれは第二期海軍予備生徒（飛行専修）に応募したときすでに、その死に赴く生を自覚していたからである。

海軍予備生徒（飛行専修）への応募は、それじたいとしては何ら特攻への編入を意味しない。

死の危険率が高い航空部署への志願、というだけのことだ。実際、森崎の同期生のなかには、陸軍に召集されるのがいやだったので師範学校中途から海軍予備生徒への道を選んだものもおり、飛行機乗りはカッコいいからという理由でその募集に応じたものもいた。海軍予備生徒というのは、学徒出陣とちがって志願制であり、大学予科、あるいは高専二年生以上を対象として採用試験を行ない、それを飛行科および一般兵科へと分けたのである。

森崎は昭和十九年八月に採用された第二期海軍予備生徒およそ六百人の一人だった。これに応募した総人数はわからないが、満州や台湾などからの応募者もおり、同期生の一人がじぶんの受験番号は一万六千台だったと語っているところから察すると、かなりの人数——二万人程度——には達したもののようである。

ところで、森崎らの海軍予備生徒という制度の一ランク上に、大学を卒業した程度の青年の志願による海軍予備学生という制度がある。これはランクとしては上だが、内容は海軍予備生徒とほぼ同じである。その、昭和十八年十月の第一期海軍予備学生に応募し、一般兵科に採用された一人に、島尾敏雄がいる。島尾はその後第一回魚雷艇学生に選ばれ、そうして昭和十九年五月、特攻要員に志願（！）したのだった。かれは海軍予備学生の募集に応じたときのことを、その三十数年後の「誘導振」（「新潮」昭和五十四年一月号、のち『魚雷艇学生』に収録）に、次のように記している。「軍隊の仕組みに対してもと私は嫌悪感を持っていたと言つてよかった。分隊、小隊、中隊、大隊、連隊、とふくれあがつて行くあの陸軍の仕組みは一層耐えがたいと思つていた。もしかして戦闘機に乗り込むことができれば、その仕組みの中から脱け出せるのではないか

という錯覚から、私は海軍飛行科予備学生の募集に応募していたのだが、厳しい訓練が課されるという飛行科には合格が叶わずに一般兵科に廻されてきたのだ」と。

島尾が適性検査で飛行科に合格しなかったのは、すでに受けていた徴兵検査で第三乙種合格というギリギリの合格であった身体の問題もさることながら、志願当時すでに二十六歳に達していた年齢の問題があつたにちがいない。(森崎のほうは志願当時二十歳である。) 機敏性や順応性の要求される飛行兵には、二十六歳という年齢は高すぎたのである。

それはともかく、島尾の海軍予備学生への応募は軍隊という組織に対するいわば「嫌悪感」からであり、船ごとに組織が小さく分かれたる海軍の、それも単身での戦闘といった性格をもつ飛行機乗りならそういった組織の束縛から自由になれるという一種の幻想によつていた。だが、森崎湊の海軍志願はこのような自由幻想とは遠いところにあつた。かれは死を既定だと意識することによつて、美しく死ぬことばかりを考えていたのである。「美しい死」とは、潔く、勇ましく死ぬという意味ではなく、殉国の理念、いわば「お国のために」という「美しい言葉」のもとに一途に死ぬことを意味していた。それゆえ、かれは死の道すじが海軍であろうと陸軍であろうと、また飛行兵であろうと陸軍の輜重兵しちじゆう——武器や食糧を運搬する役——であろうと、そのことにはさして拘泥しなかつた。

昭和十九年七月三日の日記に、森崎はこう書いている。「海軍予備学生(生徒)の採否通知まだこぬ。不採用かもしれぬ。その方の予想が強い。しかしおれは憂鬱にはならぬ。海軍にゆこうと、陸軍にゆこうと、飛行だろうと、輜重だろうと、志すのはただ火のごとき殉国の道のみ、およそ征く

身にとつて『危険率』という語ほど無意味なものはない。征くからにはたとえ飛行だろうと、輻重だろうと、それはおれの知つたことではない。何にゆこうと、ただ男らしく勇ましく、一番はげしい弾丸のまつきかけて唖喊おつかんすることを知るのみ。陸軍、海軍、飛行、輻重等の名目は虚である。うわつらの形式にとらわれて、騒ぐのは浮薄である」(原文は旧カテ、傍点引用者)と。

ここにあるのは、典型的といつてもよい、軍国青年の殉国の覚悟である。こういった紋切り型の覚悟を森崎が述べているのは、いまだ海軍予備生徒の採用通知がこないことの不安感によつていたのではないかとおもわれる。死は既定であると意識しながらも、その死への道すじはいくつかあり、その道すじがじぶんの意思では決められないことへの苛立ちが、とにもかくにもかれに紋切り型の覚悟表明を強いた、ということなのではないか。その覚悟表明は「一番はげしい弾丸のまつきかけて唖喊おつかんする」という雄々しい表現をともなっているが、しかし、「征くからにはたとえ飛行だろうと、輻重だろうと、それはおれの知つたことではない」という表現からもわかるように、その底には自己放擲ほたくのデカダンスが潜んでいた。いずれにしろ死しか残されていないのだからという放心が、「たとえ飛行だろうと、輻重だろうと……」という言葉の底に哀しく響いている。

おそらく、そういった放心が底になければ、二十歳の青年が「殉国」という言葉にみずからを預けきることはできなかつたろう。ただ、そのデカダンスを森崎は「美しく死ぬ」という精神へのスプリング・ボードとした。散華さんげの美学は、ここでは外から与えられたものではない。かれが一人で形づくつた精神となつている。海軍予備生徒への採用が決定し、三重航空隊への入隊を数

日後にひかえた昭和十九年八月四日の日記には、森崎湊という人間の精神、すなわち死に赴く生のかたちが、次のように鮮やかに刻まれている。

杖とも柱とも頼んで老後を託していた子に戦死されて、裏長屋に老いてゆく親たちが世の中にはどんなに多いことであろう。戦死者の遺族と同じ心になって泣いてくれるのが「世間」ではない。世間の姿をみると、あさましい。狡猾な者ほどうまくやって、戦争のかけにめでたしめでたしと栄えている。(中略) 戦死者たちの犠牲の上において私利をむさぼっている人間どもがどんなに多いことだろう。上層政官界に、財界に、市井巷間に……。享楽街に遊ぶ男、虚栄のみに生きる女たち……。そんなことを思うと、憤りがはてしなくわいてくる。が、おれは眼を転じて見なければならぬ。先進幾万、幾十万の快男子たちが、銃後の人々を守らんとために死んで行ったか。幾十万の戦死者、顔も知らず、名も知らず、見も聞きもせぬその戦死者たちにおれは旧知のごとき親近感を持つ。どんなに好漢がおったことだろう。おれの大好きな快男子たちが、どんなにおったことだろう。その快男子たちを思えば、未知未見のその人達にあふれるばかりの友情を感じる。先進の快男子たちのことを思うと、その跡を継がねばならぬ責任を感じる。おれはあさましい俗世間は見るまい。そしてただ、笑って死んだ快男子たちのことだけを見よう。

これは、現在残っている森崎湊の日記の最末尾に記された言葉である。このとき森崎は、二十

歳と三ヵ月。いわばそれは、二十歳の遺書といった性格の文字である。この言葉のさきに、死以外おそらくどのような生も考えられない。かれは滅亡へむかって生きていったのである。

もちろん、かれの三重航空隊への入隊は決定したとはいふものの、八月十日に行なわれる身体・適性検査によつて、一般兵科に編入され武山海兵団に転属させられる可能性もなくはなかつた。また、その後によつて、いる特攻要員への志願も、それがいちおう志願制をとつてはいるかぎりのように処理されるかもわからなかつた。そして事実問題としてみると、三重航空隊へは特攻機の配備もほとんどなされないまま敗戦がおとずれ、海軍少尉候補生になつたばかりの森崎はふたたび生に直面しなければならなくなるのだ。

けれど、入隊を数日後にひかえ、「おれはあさましい俗世間は見るまい。そしてただ、笑つて死んだ快男子たちのことだけを見よう」と記した森崎にとつて、死のみが既定の事実であるという意識がかれに自覚的に死に赴く生を生きさせようとしたのである。「俗世間」がどのような醜態をみせようとも、また現実がどのようなふうにも、かれは「笑つて死んだ快男子」の「跡を継ぐ」ことに生の目的を定めていた。死にむかつて生きようとしたものが綴つた言葉、それはやはり二十歳の遺書とよぶのがふさわしいだろう。